

続

徒然
つれづれ

気骨ある人

桑野 巍

近畿地方に住んでいる「卒業生」たちが毎年春に集う。いわゆる会社のOB会だ。今年は大阪府庁新別館北館の以和貴荘が会場だった。年一回口うるさい連中が30人ばかり出席、昼食をともにした。席上、弱輩の私にも発言の順番が回ってきた。“演説”の準備稿などはしておらず、とっさの思いつきで明治生まれの井原隆一さん（元埼玉銀行専務取締役）と平櫛田中さん（木彫りの名人、文化勲章受章者）が残した言葉を披露した。

現役時代から「あいつの話は長い」と周囲から嫌がられていることは知っていたが、この日も予定の3分が5分以上になって先輩や旧同僚から変な目で見られた。話の中身は井原さんの「0 1 2 3」と平櫛さんが100歳になられた時の言葉「わしがやらねば誰がやる」だ。井原さんは経営不振の系列会社を見事再建した苦勞人。企業は借金を0にすること、東証1部に上場し業界で1位を目指すこと、配当は年2割、ボーナスは年3回を目標にしてこれを実現した名経営者だった。

平櫛さんは明治5年生まれ、99歳の時に東京・文京区から小平市に転居、100歳になった時に向こう30年間分の木彫り用の材木を仕入れたことでも有名。同市の平櫛田中記念館を訪ね、でっかい材木の前で写真をとった記憶がある。昭和54年107歳で永眠された。こうした尊敬する人物の話を紹介し「皆さんどうぞ長生きして下さい」と結んだ。

この会合が閉会したあと近くの喫茶店での二次会に出席したら、隣に東京から参加した先輩が座った。「君は岡山県出身だったよな。同郷の土光敏夫さん（明治29年生まれ、昭和50年代の行政改革推進審議会会長）の話が出なかったのは残念」と先輩はおっしゃる。少しだけ教えようと前置きして「土光論」を展開し始めた。土光さんは当時人々に感銘を与えた人で、質素な暮らし、飾らない性格、骨太で一途な姿を俺は知っている、というのだ。

土光さんは横浜市郊外の古びた家に住んでいた。朝5時に起き法華経を誦ずる。テレビの「明るい農村」を見たあと新聞を丹念に読む。自家製のヨーグルトと季節の野菜をミキサーにかけたジュースを飲む。土光さんといえばメザシが有名だが、あのころ

はメザシが高かったので煮干しをかじっていた。

財界の超大物（元経団連会長）だったからぜいたくをしていたと思っちゃあ失礼だ。彼は「暮らしは低く、志（思い）は高く」という言葉を実践していた。そのころ「皆んな自分のことばかり考え、政治なんかも国民が信頼しているかどうか」が口癖だった。お家の応接間を兼ねた書斎には時代物的な家具と不釣り合いな新刊書や横文字書物、経済、仏典、歴史、シルクロードもの、天文学などが書棚にあり、幅広い勉強をされていた。

日本の行政改革についても熱心で「行革は国づくりだよ。若い者の邪魔をしちゃあだめなんだ。老いぼれたら若い者の靴を磨いてやりゃあいいんだよ」とおっしゃって、若人に期待をかけていたんだ。とかくいま時の少し古手の人たちは「いまの若者は」と言ってお先輩面をする傾向が強いが、このことを案じておられたのだろうか。それとも人間社会はことあるごとに「足の引っ張り合い」や「出る杭は打たれる」ことが多いことに警鐘を鳴らそうとお考えだったのだろうか。

そこで思い出したのが若き“明治人”の地方公務員氏だ。彼は肝のすわった20年選手で「出る杭が腐らない五カ条」を唱えていた。それは①批判されるのは無視されるよりまし、と喜ぼう②足を引っ張る人を敵と思わず、辛抱強く巻き込もう③わかってくれる住民や隠れファンは必ずいるんだと思おう④自分のまちが好きなら、自分のロマンにかけよう⑤少なくとも5年間は自分の主張を続けてみよう——というものだ。

明治生まれの多くの人たちは気骨があつて骨太、方向性がしっかりしており、学ぶべきことが多い。大正生まれの人や昭和前半生まれの人たちも明治の人の精神を引き継いでいるものの、私を含めて“柔な人”も見受ける。その点では昭和中期生まれのこの地方公務員氏は気骨とねばり強さがある。それに自国やふるさとを住みよくしようという強い熱意を持っているとみた。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）